

心相の巻

心相の巻

前編

光明生活……………二一

衆生心の二面……………二一

光化の心相……………二四

願行……………二五

後編

光明……………一

光明生活 (二頁—二〇頁速記験者の速記)

信仰の生活 光明の生活には三階があります。初めは喚起の位で、自分の心の中に信仰心を喚起する位であります。之を信仰の生活とも光明の生活とも申します。喚起は喚び起すのでありますから如來の方から云へば難思光とも申します。何故かと云へば初めは信仰の光明と言つても何様なものか眼に見えませぬから分りませぬが、太陽の光が段々明るくなって来て、何となく難有い楽しいやうな状態になつて来るやうなものであります。信仰が出来ますれば楽しんで働くことが出来ます。其の如く信仰の光明も一方に道理に明るい道理となり一方には何となく有難いものとなり御恵み御慈悲を受けますと感謝の意を以て働くことが出来ます。夫等が光明生活の状態であります。それを喚起せずに或は光明と言つても有り難いと云ふのは何様なものか一向氣が付きませぬから難思光であります。

一

二

云何に信心を喚起するかの因縁を述べば即ち因性又種因に遠と近との二因あり。遠因と近因は心地である。遠因とは一切衆生惡有佛性として個々皆佛となることが出来る佛性と云ふ心地を有つて居る。然るに此心地が恣にして置くに煩惱と云ふ我儘な雑草が生ひ繁つて心地が瘦せて仕舞つて居る。例へば土地にても雑草が生ひ繁つて居るのは本土土地が龜惡と云ふではない否選つて沃地程捨て置く時は惡草が繁鬱る其の如く人は煩惱が強いから惡人と云ふ譯ではない。佛性の良田を端無く捨て置く爲めに我儘な煩惱に荒れ果つるのである。其心地を開拓して好種因を播布して立派な靈格と云ふ好結果を爲すべきの目的である。

信心の開拓は懺悔

先づ信仰を得て靈の生活に入らんと欲する順序としては現在の我は罪惡である汚れと苦と罪とを有つて居ることを自覺し、此我儘なる雑草を除去せざればならぬ。此に自己の業障深重なるを感じて苦悶が起る。然しながら自己の罪惡であることは何分の光に接して初めて己は罪惡と感じらるのである。

喚起の因縁

人の佛性は奥に潜んで居るのが遠因として而して宿因が近因となる。其れは即ち世間で云はゞ遺傳素質である。各個々悉く其資質が同じ事ではなく、例へば植物の種を播布するに其土地に適當せる種類は繁殖し易きが如く、人に惡に感染し易きと又善に薰習し易きとあり。硬地に蒔ける種は收穫少く沃地に播けるは收穫繁きが如し。

初めて信仰に這入つて罪障懺悔と云ふことを言ひますが氣儘の草を取除いて行くこととであります。爾うしますと凡夫の自性は佛性となる性質を持つて居るのである。人間の本来は善いものであるから善い心を持つて居りながらそれを棄てて行くから罪惡になります。

佛の種を蒔いて行く。こつちは自性でありますから蒔きさへすれば段々善い實を結

三

ぶこことが出来るのであります。夫れが因であります。如來から受けました本性がありますから如來の境涯に入ることが出来るのは同じ事でありまして長い間の習慣で遺傳とか或は宿因とかで宗教に遠い人があります。同じ種子を蒔きましても石地に蒔けば收穫が取れませぬ。良い土地に蒔けば收穫が多いと云ふやうなわけで、信仰に區別があります、それが即ち性でございまして、人間には何れも淨土と云つて何だか知らぬが難有いものが宇宙にあると云へば、さう云ふやうに思はれる性を持つて居ります。それを助けるのが縁であります。「佛種は縁より起る」と言ひます。近因と云ふのは自分の方の自性を以て段々進めて信仰を植付けて行くのであります。木があり火があり、木は火を附けると燃える性を有つて居ります。火を附けませぬければ燃えませぬ。どなたでも信仰の火が移りませぬと信仰になりませぬ。宗教と云ふものはつまり理屈ばかり聽いて居ります者は理屈ばかり覺へて本當に活きた信仰がありません。活きた信仰は例へて言ひますと、我々は燃ゆる性質を持つて居るから先方の火を附けるのであります。此方の信仰が薄いと線香の火であります。何だか難有いと思へば有り難いやうである。線香の火を以て生木に火を附けやうとすると火が消えてしまふけれども、烈火のやうな信仰を持つて居ると、法然上人や弘法大師の如く直ちに焼いてしまふ。智慧に火が附いてくるから自然明るくなる。

さてどう云ふもので信仰を養ふかと云へば五通りあります。資糧即ち養ふ食物であります。禮拜、讀經、觀經、祈念、讚美であります。朝夕自分の眞心を以て拜禮します。爾うして自分の眞心が先方に行つて仕舞ふので、禮拜するのは丁度食物を食べるやうなものであります。食物にしましては味も何もありません。我々の身體でも爾うです。母の胎内に居る時は別に口で乳ばかり呑むわけでありませぬ。母の養分が廻つて行くのであります。味も何もありません。禮拜しなさいと親が云ふことは丁度胎内で養はれて居るやうなものであります。それが段々大きくなると味が分つて来て食へたいやうになります。信仰の養分も其の通りであります。そこで朝夕の禮

拜でもお經を讀みますのも之は(開導)と申しまして釋迦さんが實驗せられた事を説いてあるのでありますから之を讀みますと極樂は斯様なものであると段々其方に導かれて行くのであります。觀察は三昧に入つて行きますと曇がなくなつて行きますから自分の心に靈界の光明が感ぜられて來ます。祈念とは南無阿彌陀佛と稱へるのも我を救ひ給へんに食物を興へ給へと云ふやうなものであります。讚美歌を唄つて祈るのも佛教にも澤山あります。それを歌ひますと知らずく天國に參ります。是だけでも始終心の中で用いて居りますれば自然に明るくなつて來ます。南無阿彌陀佛と泣けば惡みの乳汁を戴くのであつて、それで靈性が育ちます。養分であります。資糧であります。さう云ふ風な階級になつて行きますかと云ひますと信仰の種子を蒔いて行きますとそれが信根の根になつて佛になる積分をもつて居りますから、一番の種子となりますのは南無阿彌陀佛と稱へますと、阿彌陀と云ふのは佛であるそれを種子にする、さうして養つて行く。恰も大きな杉の實であつても蒔いて直ぐ枝はありませぬが毎日養つて行くと根が出て枝が出て大くなるのであります。南無阿彌陀佛と云ふ時は根も葉もありませんが養つて行くと元來が如來の本體になるべき性質を持つて居りますから成佛することが出來ます。信念のない信仰は發達させぬ。成る程の詰つたものであると云つても信仰しなければ何にもなりません。爾うして禮拜をし讀經して養分を取るのであります。種子を蒔きませぬといくら禮拜をしましても何の役にも立ちませぬ。種子さへ蒔けばしまひには根が生へて來ます併しそれを疑ひますと根が生へませぬ。如來の光明は何か分らぬが心を其方に用いて居ります中に自分の心に成る程と云ふ感覺を現して信仰の芽生をするのであります。

(中 斷)

何だか知らぬが目があいたやうな心地になる。それが夜明けである。植物に譬へてみれば初め蒔いた種子に佛様の芽が出て來るのである。人間なら初めオギャツと生れたやうなものである。何だか知らぬが自分が活きた信仰に生れて來るのである。成る

程光明と云ふものは目に見えぬが信仰の夜明けになつて心に其の感がついて来る。かすかに靈光に觸れたのである。

次は開發の位である。植物で云へば丁度花が開いたやうなもので、こゝに五根五力と云ふものがある。信仰の根が出来て開發して花が咲くやうなものである。人間なら生れ出て漸次大きくなつて之から結婚しやうと云ふ時である。本來の面目に何となく接したい靈界の火に接したい信仰が開發すると丁度結婚して同棲するやうに大なる靈と自分とは離れやうがない。全く靈性が開發して信仰の恵みを得たる美味と快樂とは其工合は言語で云へぬ冷隴自知である。無稱光、口に云ふことが出来ぬ。花の開くに雌蕊雄蕊が働をする如く我々の靈性と如來の靈性と合致するのがそれと同じである。擇法、精進、喜、輕安、定、捨、念の七覺支である。念佛三昧が深く精神にはいつた人は此味が分る。ちよつと感じ難いしやうが自分の精神と如來と一になるのである。弓を習ふにも的の方に精神をこめてやるのである。的を大きくすれば百發百中だしやうがそれでは弓の稽古にならぬ。自分の方から直して行く。三昧とは自分の一心と先方の的とが一緒になるのである。人の心は往來する。一日中とどめなしに働いてゐる。さう云ふ心を経めてみたいと心を用ゐるのである。それを擇法と云ふ。精進と云ふのは精神を注ぐのである。一心一向になると耀く方面に進んで行く。さうすると(一)幽かに湧出して来る、深く三昧に行けば邪念がなくなる、純粹の精神が湧出して来る。喜は何となる喜を感ずる。もう少し深くなると輕安となる。佛様に乘つてしまふ私を忘れてしまふ。何となく身體が安々と有るか無いか分らぬやうに感ずる。世界の極樂に向つて行くのである。人は安かになつて軽くして置くべきものを自分の心の中に種々なものを持ち込んで苦むのである。自分の心一つを守つて行けばよいのに他人の事まで拾ひ込むから堪へられぬ。東京の人で至つて気が短い人であつたが一心に念佛して三日目になると何だか知らぬが何も心がなくなつてしまつたやうに思つた、こんな心地は生れて始めて始めであると云ふことである。之を輕安と申します。それから定

と云ふのは佛と我と一體になるのである。即ち禪定である。月を見てゐると我が月か月が我が月からなくなる。自分の心と佛の心と分らぬやうになつたのが定である。捨と云ふのは初めは注意して居らぬと何時の間にか離れてしまふ。段々しまひには丁度弓を習ふやうなもので慣れて来ると先方を見ないでも定つていつでも的に中る。それと同じことで佛といつても離れぬのである。例へば字を書く時手本を見て書く時は其通り書いて居るが手本を離れると書けぬが、それが純熟してくるとわき目でも書くことが出来る大砲でもさうである。熟練すると話しながら心持よく中るやうになる。それが捨である念と云ふのはすつかり染み込んでしまつたのである。自分の心に佛が飛び込んでしまつたのである。布と藍は別物であるが染み込んで来ると藍と一緒になつて来ると同じことである。自分のものか先方のものか別けやうと思つても別けられぬと云ふやうなもので、こゝに來たのが開發した姿である。自分の心が佛の心になる。次は體現位である。光明中の人となつて何の爲めに光明を受けたかと云へば、丁度何の爲めに電氣をつけたかそれは働く爲である機械を運轉させる爲めであると云ふやうに自分の心の本來の電氣力は彌陀の十方遍照と同じく何處へでも充滿して居る。それで如來の電氣は自分のものになつて来る。有り難いから働く力がある。電氣と同じことである。信仰がないと電氣がつかぬ。明るくなる力となり運轉する力となる。

光明生活

有餘涅槃 理想的淨土

無餘涅槃 實在的淨土

第三階の信仰。既に光明を獲得して光明中の人となると我々の方から受けた光明を自分の身口意、身で行ふ口に言ふ心で思ふこと、働に現はすことである。受けし光明を現に現はして來ることである。光明生活(一)實現と云ふのは如來の思召が自分(一)に似て居るからそれが實現せらるることである。それを如來の方から云へば日月に超へて居る光である。動物植物地球上にあるものは太陽の光の下に生活し

て行くがそれがなければ生きて居られぬ。信仰にはいらぬ人は靈的生活が出来ぬ。弘法大師法然上人の如きは申すまでもなく、光明生活に入つても小さい大きいがありまして弘法大師法然上人の如くに働かが出来ませぬ。自分としては自分だけの働かをするれば宜いのである。電氣でも百燭も五燭もある如くで、人々器だけに受けて居るだけに働かには現はれて来るのである。それが靈的生活である。

體現と云ふ働きに付いて十善或は八正道とある。十善と云ふのは、身と口と意の中に身に於て殺生しないとか、盜まぬとか奸淫せぬとか、身に於て三、口に於て四、意に於て三である。十善の裏は惡である。それをなくして行くのが不殺生不邪淫不盜それから口に於ては妄語、綺語、惡口、兩舌、虚偽を云ふそれが光明の中にはいりませんと自然虚偽を云ふことがない。此十善を保つに二通りあります。十戒を戒法として保つて行くのと信仰によつて行くのと違ひます。戒法には勿れと云ふ字が附く、之を犯すといかぬと制止して行くのが戒法で保つて行くのである。光明中の生活で行くのは勿れと云ふぬでも殺すことは出来ぬ盜まうと思つても光明中に盜まれぬ。奸淫しやうと言つても出来ぬ。虚偽を言ふと云つても光明中では言へぬ。綺語と云ふのは飾り語であります。如來の光明中の心にならぬ虚偽は言はぬ嘲弄することは出来ぬ兩舌は二枚舌を使ふ。それが光明中では使へぬと云ふやうになるのが信仰が出来る姿である。戒法と信仰とはそれだけ違ふ。戒法は保たねばならぬ。信仰ではならぬと云ふのではないが自分で出来ぬやうになるのである。

八正道とは正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定と八道がある。惡と邪とは、惡は形の上に形はす。精神の内面に持つて居る惡を邪と云ふ。其反對が正である。善と云ふは形の上に現はれるもので精神的に善いと云ふのが正である。それに八正道がある。光明生活に入れば善と云ふは小さい。正である。正見は量見である。自分の見込である。量見が正しければそれから正が出来る。正思と云ふのは其場々の正しい考である。量見が惡いと正しい考はしない。正語と云ふのは口で

言ふことが正しい眞理に叶ふ言語である。正業と云ふのは行爲である。見が正しければ如來の思召に叶ふ行動をなす。正命と云ふのは生活である。たとひ他人の物を盗んでも食へさへすれば生きて居られる。それでは正命ではありませぬ。正しい生活ではありませぬ。渴しても盜泉の水を飲まずで正しい生活をしなければならぬ。正精進、之は働んで仕事をするのである。正しく働いて行くのである。正念と云ふのは、其場々で考ふることであれば之はしなげければならぬがこつちは自分の心に浸み込んで習慣性となつて心の中に其場々で考ふるのでなく胸の中に感じて出て来るのである

(中 斷)

禪定、自分の心の統一が出来まして亂れぬことである。智慧は自分の行爲に就いて斯う云ふことは悪い善いと辨別することが出来る。それらが光明中の生活である。之が細かに覺えて居られずとも信仰が其點に行けば自分の心に浮んで来るのである。終に臨み皆さんが其一部でも御受けになれば受けただけの光明の働かが出来て来るといふことに就いてお話ししやう。三階級に別けてありますが、こゝまで行かなければ出来ぬかと云へば一應は階級を擧げたが其一分でも受ければ氣がついてみれば一分の光明があります。之を斯う云ふ風に行くのが道であると云ふことが氣がついてくる。それが光明である。そう云ふ風に感じて進めば實行の上にはあらはれて来る筈である。心の中に受くれば働の上には表れて来る。光明中に入りし人とまた受けぬ人は自然々々に異つて来る。かりに日本歴史上で光明を受けし人と受けぬ人の御話をすれば、織田信長、徳川家康の如きは最有名である。太閤秀吉と雖織田信長に逢つたから其名を擧げたので徳川十五代も家康があつたからである。家康公は戦争の中に居ても念佛を稱へぬことはありませぬ。兩大將が武田勝頼を相手に天目山で戦ひ武田勝頼が討死して首實験の時織田信長は勝頼の首を睨んで唾を吐きかけ、おのれ勝頼おのれの如き分齊を以て抵抗するとは不届な奴だと足蹴にした。然るに今度家康公の實験に供へたるに、家康公は戦争に出たる時も毎時も阿彌陀如來を離れる

ことはない。勝頼の首級を持つて来ると云ふことであつたから燈明を如來に捧げ待つて居て持つて来た首級を先づ阿彌陀如來の前に出しまして、さて之を反對にしたらうだろう。戦争するからは父祖の代から自分の目的を達し天下になりたいそれが討死をしたのである。敵となり味方となるのも過去の因縁で仕方がない併し斯様になつたら仇怨はない。一切平等であると云つて、念佛を稱へ未來は一蓮托生極樂淨土へ導き給へど、勝頼の菩提を弔つたと云ふことである。さて此兩將の結果はどうなつたかと云へば織田信長は京都の本能寺で股肱と頼む明智光秀に弑せられた。光秀に徳川家康の饗應使を命じた所が頗る立派に郷軍な扱ひをした。そこで信長は怒つておのれ光秀家康に對する貴様の態度は何だ。家康は予より目下でないか。然るに目上に對するやうな有様は何だと云つて蘭丸に打たした。初め信長は光秀に對して郷軍にせよと命じたのであるその爲めに光秀は主命を重んじ郷軍にしたのであるが、それを怒つた。そこで光秀もいかに酷いと思つた。信長はそんな目もない奴に祿を與へたのは残念である。今日限り暇をやる出て行けぐすくしてゐると手打ちにすると云ふやうな有様であつた。それが自分の生命を失ふ動機となつたのである。然るに家康はどうかと云へば鎌倉に於て頼朝が幕府を開きし時分から北條九代足利十三代の中に何處ともなく戦争ばかりであつたのを太平の御代にしたのが家康の功である。家康は自分の敵に對しても同情の涙にくれ未來までも吊ふと云ふのはどう云ふわけかと云へば家康は三河で生れたが、三河に大樹寺と云ふ寺に寶物になつてゐる本があつてそれを見ると、斯う云ふことが書いてある。徳川家康が十九歳の時其頃は松平元康と言つて居たさうで、今川義元の幕下であつて大高の城を守つて居たが今川義元が六萬の軍勢を率ゐて織田信長と戦争をすることに成りし時桶狭間で義元が夜分酒宴をしてゐる中に間者があつて遂に戦争に及ばずして討死した。六萬の軍勢も大將が討死したから仕方がない其時元康も戦争の中止を受けたから家臣に暇をくれ自分は切腹する積りであるからお前達は將來出世をしてくれと云つて先祖代々仕へた所の家來に暇をやつて三河の大樹

寺にやつて来た。其時の上人が發誓上人と申して今川義元の戦死を聞いて自分の檀家たる松平元康も落ちて来るだらうと心待ちに待つて居たさうである。すると五月の十日の夕刻に果して家康がやつて来た。門を叩くから開いて見ると其時初めて會つたのが家康である。其時は家來に暇をやりし中から十八人計りが家康の後をつけて来た。そこでお前達は何うして跟いて来たかと問へば、どうも私共は忍びませぬから斯うして御供をしましたと云ふから、そこで其者等を寺内に入れられたが自分は之から切腹する積りであると云ふのを、上人はそれは違つた心得である。死は易し生は難し、生存へなさいと意見をした所が家康は、いやさうでない。今に敵がやつて来る。僅か之だけの人数では戦争は出来ない。名もないものに討たれんより切腹をする方が宜いと云ふと、上人はイヤ寺にも坊さんが四五人居ります。又百姓も居りますからこゝは拙僧におまかせなさいと云ふから、さやうなら御まかせ申しませう。上人はそれにしてもお尋ねする事がある。十六歳の時初陣になつたと云ふがどう云ふ心を以て戦争をされたかそれが承りたい。と云つたら、自分は武士であるから首級一つも餘計に取りたい城も取り國も取つて天下を掌握したい、さうして之を子孫に譲つて名を末代にのこしたいのが戦争する心の持ち方であると言つた。上人は他人の首級を取ると云ふことは強盗であると云つたら、成る程首級を取ると云ふのは盗むやうなものであるが之は武士の習ひ仕方がない。イヤ、爾うではない士農工商悉く自分／＼の受け持を以て國家の爲に働いて居る。百姓にしても自分の食ふ米さへ取れば宜いと云ふのではない國家の人の食物を作るのが農家の勤である。職人でも其の通り、大工が自分の家さへ建つれば宜しいと言ふものではない。商人でも自分の着る着物ばかりでない天下の人の着る衣服を賣るのである。それが自分の勤めである。天地萬物悉く如來様から命せられた所の勤めがある。此世を治める者がなければならぬ。強盗が横行して良民も其職分をつくすことが出来ぬ。それを定めて四民安堵するやうにやつて行くのが武士の勤であるから自分の爲めではない、天下の爲めである。頼朝が幕府を鎌倉に開

いても自己の爲めに働くこと云ふ心であるから、頼朝より偉い人が出ると其者に取られてしまふ。天下の爲めにする云ふ心であれば敵はない。それが天から受けた務めである。菩薩の修行をするのでありますと懇々と説き聽かされた家康も大に感じまして自分もさうしやうとそれから十九日二十一日二十二日と待つて最早や敵がやつて来るに相違ない戦争をしなければならぬ其時に七十二人方ある坊さんが居りまして其坊さんを（一）にして十八人の家来と、四五十人の坊さん、それに百姓を率ゐて數十流の南無阿彌陀佛の旗を翻し澤山の軍勢が居るやうに見せかけ待ち受けて居つた處が果して一萬人ばかりの軍勢が攻めて来て寺を十重二十重に取り圍んだ。家康は正門上人は後門と定つて家康は前門にやつて来て、門を開けと云つたら、其大力の坊さんがまだ早いと制して居る。其のうちに時分は好しと颯と門を開くと、一人の武士が其の坊さん目掛けて切り込んで来た。何しろ七十二人方ある坊さんでありますから鐵棒を以て其武士を一撃の下に打ち殺した其勢に敵も氣を吞まれて躊躇つた。（以下斷絶）

衆生心の二面

我等衆生の心には生滅と不生滅との二方面が有つて、起信論に生滅と不生滅と和合せる吾人の精神をアリア識と云ふ而して其生滅する方をアライ識と名づけ永恒不滅の方を如來藏性と號ふ。二面の中に生滅する方ばかりを認めて永恒不滅の方を自覺せざるものを凡夫と云ふ。佛教は其永恒不滅の性を發見して無量壽と爲るのが目的である其生滅には一期の生滅と念々生滅とがある。一期とは人間が一生涯を働き畢つて而して此生活の機能が滅する時を云ふ。念々生滅とは此身體も心も何時も常住の様と思つてゐるけれども始終新陳代謝して暫くも休みなしに生滅して居るのである。此肉體を組織する凡ての細胞が休みなしに一度活きて働いたのは又奮く成りて新しき營養から

受けた活けるのと替つて居るから刹那々に生滅して居るのである。殊に精神の生滅即ち活動に於て實に一晝夜に八億四千念に互りて生滅變化してゐると云ふのである。人間の心と云ふものは何處までも一定して居るものでなく活動して居るものであります。蠟燭の炎々と燃るが如くである。人間の心も同じ事でも八億四千念生滅して居ると云ふけれども一晝夜に八億四千念など、心々生滅する實に一秒時間に何萬の生滅があるのである。昔或人が或る佛敎家に問ふて佛敎に云ふごとく一晝夜八億四千念など、其んな細かな時間を割り出し様があるならそんな細かな時間を示して見よと言はれたすると斯様に示された。今爰に半紙千枚累ねて有るとし右の手に鋭利なる千枚通を執つて力限りに其紙を刺し通す一刹那に刺し通した。然るに其錐の先きが其紙一枚を通る時間即ち千枚の紙一枚毎に時間が殊にして居る。故に一刹那に千の念が有る譯である。されば八億四千の時間割出しが出来る次第である。其の如くに心の働きは細かにわたりて働いて居る。身體も精神も斯の如くに微細に働きて一日の業務を執つて而して夜分になると寝て休む。之が一日一夜の生滅である。其一日一夜を何萬か累ると身心全部の活動の休養期に成ると永眠となつて、是が一期の生滅である。朝起れば又夜に寝、寝ては起きるが如く、生ずれば死し死すれば生じ生滅變化は有爲遷流の世の掟なのである。人の心性に二面を有して居る。例へば庭の芝生の春になると縁の芽を生じ、冬には枯れて死んでしまふ。春は生じ冬は滅すると外部から見たので、其の土中の根の方は矢張何年昔から滅して居らぬ。其の如く一切衆生が生滅するのは外部から見ゆるので、一面には宇宙全體永恒不滅の大靈を根底として居る。吾人生滅變化して居る此心の根底なる如來藏性の方面が開いて見れば常住不滅の實體である。斯の如く吾人が全く二方面具して居るから世の學者の中に人死すれば物質の原子に歸つて全く滅して仕舞ふと認むるものは其生滅の方面を執つて居る學者なので草を芝の外面から觀察して居るのである。又人の靈性は永遠に不滅であるのは人の心性の根底なる如來藏性の方面の人生を認めて居るのである。草を根の方面から見たやうなものである。

方面は異にして居るけれども其學説は事實と見て差支はないと思ふ。

二四

光化の心相

人生の歸趣、即ち人間が斯うして生活して居る目的に就いては釋尊の教によれば、大なる目的を發見して其真理の標準に則り敢て突進しなければならぬ。宇宙の大法から現れたる如來の勢力に引き上げられ永遠の光明に隨つて進み行くのである。彌陀の本願に歸趣する行程である。宇宙の目的が即ち自己の目的となる。其真理の目的に隨つて最善の極なる清淨國に進趣す。即ち極樂又神の國たるを云ふ。之を知らずに居るのが迷の中に居る生活である。それを知つて從つて行くのが光明の生活である。永遠の終局に達するのが極樂とも天國とも成佛とも申します。若し光明獲得したる心と未だ得ざる天然の状態とは如何なる異點があるか、又光明獲得したる心相はいかに變化するかと云へば、人の精神は本は一つであるが感覺と感情と知力と意志と分類することが出来る。天然の人の感覺が汚れ穢い。故に之が清淨光を被つて清淨皎潔となる。感情には歡喜光に美化すると心廣く體肝に歡喜と妙樂に充さる。又凡夫は迷である。其中に悟りの光を與へて呉れるのが智慧光である。人間は意思欲の奴隷である。何うしても悪いことを覺える。それを信仰の力に救はれて不斷其の力によりて善い働きが出来るのが不斷光である。

願行

佛敎の終局目的を實行の方から言はゞ、上求菩提、下化衆生が佛心佛行の意志である。目的である。上求とは願作佛心、發願すれば完全圓滿な靈格人格と成り度いと云ふ願望である。下化とは一切の衆生を共に自己と同一に完成せんとする願望である。向上、向下の願望である。願作佛心の根底は衆生の心の根には、衆生悉有佛性とて人々本來性圓滿なる靈格、即ち佛に成り得らる、本能を持って居る。此の靈の本能を完全に

二五

開發し圓滿に完成せんと欲せば、之を成就せしむる法に由らざるを得ず。例へば人に知識の能があつても教育等の助成するに由らざれば、其の知能も開發せざる如く、佛性具有すとも、開發の法を待たざるを得ず、佛法即ち其れが開發の機關である。

二六

本宇宙全なる靈體の一分なる靈性が如何に開發すべき哉。是佛行である。佛性を實現せざれば上求の向上すること能はず、宇宙には無上菩提を自ら至善圓滿なる神國に達し得らるゝ大道あり。宇宙大道が即ち無上菩提なので此大道法に隨ふ者が菩提心と云ふ。菩提心は即ち終局に歸する大法に則つたのである。

本來宇宙には佛の如き大道法が存在し之が即佛法である。其の道法の存すること、宇宙に自然法の行はれて居ると同じことにて、自然法は自然界に行はるゝ日月星等の運行となり一切萬物の理法と爲つて居る。無上大道法が宇宙に存在して、衆生心靈界に行はるゝ多くの此大道法に合致したる意志が即ち菩提心である。

菩提心

人は靈性的生命を以て動物界を越えて肉の生活以上の靈性生活となる。

肉の生活は肉體の幸福を以て目的とす。靈的生活の目的は肉の幸福を犠牲にして進んで宇宙の目的を靈我の目的とし靈我は大靈と合致せるが故に自己の有らんに限り向上の爲に努力す。靈我實現主義である。伏藏啓發せんが爲めには身體の苦勤艱難は甘んじて受く或人曰く人は油壺に油を盛つて常に燃しつゝあり燃し盡す迄は燈せと。人は天性痴鈍なりとも大靈と繋る靈の伏能あり。至心推勵の結果は天稟の偉人よりも功を遂る事大なり。實に靈の伏能は宇宙と共に無限である。大道法を根底とす。伏能遺憾なく發揮して無限に向上する菩提心と爲る。宇宙大道と一致する意志と云ふ義である。佛敎に菩提心を發すものは最も大なりと爲す假令現在は小にあるも其意志に於て宇宙と共に大なるなり。昔、印度に羅漢果を得たる聖者あり。一の小沙彌を待者として道に就く。自ら前に行き沙彌を隨行せしむ。小沙彌自ら念願す願我大菩提心を發し成佛せんと。聖者他心智を以て沙彌の意念を知見して謂へらく此の沙彌現に少なりと雖

二七

も其の志願甚大なり。我沙彌に侍し隨行せんと。沙彌が携帶する物を取て沙彌を前立たして自ら隨行す。沙彌又念願す大菩提心を發して一切を度す事甚だ苦難なり。自ら堪へざる處なり。如かじ羅漢の靈果を得んにはと。時に聖者又沙彌の志念を見て自ら前に立ち沙彌を隨はしむこと例の如し。大菩提心を發す者現在は小なりといへども將來偉人と成らん。人は其の理想に又心願に遠大なるは現在小なりと雖も實に畏敬するに値あり。志願の最大なるもの菩提心なり。

靈能開發

人は肉體より見れば動物の進化したる特等の動物たるに過ぎざるも、大靈と繋れる靈の伏能を開發し靈的生活に入るの寶鑰を授與せらるゝの特權を得たる精神生命なり實に大なる宇宙大靈徳を左右するを得。靈能を實致に活動するに至らざれば永遠の目的に達することは能はず。此の靈能實行の菩提心は最高等なる道徳心である。宇宙中心終局なる眞善美の極度に到るの道徳心である。道徳秩序。道徳には喩は世間の國道、又は縣道と云ふ如く其の驛路の中心終局なくてはならぬ。帝都を終點として其に向ふ如く道徳行爲の目的も亦然り。大菩提道とは無上佛果の道。蓋し心靈が大靈と合一し神の聖意と合一したる道徳的情意を云ふのである。

大道心は如來の聖意にして一切衆生心靈の合一意志である。人生の無上大道に達するを目的にする意志が菩提心と云ふのである。

此處に達する菩提心を起せば我と他と同體の慈愛心となる。

大靈と合一する道心は靈的生命の生活である。喩へば太陽の力用を離れて肉の生活能はざる如く、吾が靈が大靈の靈力と親密に關聯すべき菩提心なき生命は、靈に飢へし生命である。内に省みて千萬人と雖も恐れざる高等なる勇氣なく、天に赫く理想なく、氣品卑く靈的勇氣奮起せず。自と彼との同體の慈愛なく同體大悲の情根なきものは他人を感化する力なく、斯の如き意志なきものは、假使其の業に成功するとも、唯だ利己の劣情を満足せるに過ぎず。大靈の意志たる大道に範らずして何にか達せん。

彼が前途は唯だ死を怖るゝと此世に執着を遺すに在り。其の意志に於ては寧ろ憐むべき飢鬼に過ぎぬ。

自己の靈の伏能を開發せん靈的意志は菩提心と爲る。此の菩提心は宇宙の大道法と合致する意志である。故に靈性の慾望する處は宇宙大道法である。大道法の目的は一切の衆生の靈性の意志である。宇宙は大道法の常恒運流にして大靈の妙用實に不可思議なり。天體の秩序人の社會の發達、終局は大靈に歸す。其の道法は宇宙に常に流行す。此の大道法に契ふ時は圓滿に發達の性を遂ぐ。此の性を遂げんが爲に一心に努力し道法に則つて努力し然して其の實行が道法に順ふ者は益々向上す。宇宙大道は自然界の方面に在りては其の秩序正しく天地位し百物成生して功を修めつゝあり。人もまた

宇宙の大法に則つて最終の目的に向つて進趣し、自己の伏能を有らん限り發展して向上的に生活すべし

天	哲	淨 士	信	嚴 華
愛の神	終局目的 世界 統一	無限光 人 佛	眞 如 依 言 (空)	佛 法報應
被造物	宇 宙	世 界 無限差別	生 滅	衆 生 十界三千
造り主	實 體 重々無盡	絶 對 無限()體	如來藏 生 滅 不生滅	心 不可思議

用	相	體	神の定相 世界に含 蓄せる 終局を照す光 終局には攝取の光と 顯る	終局目的理性と	宇宙の根底 因果の原 理 絶體
			世界を一大全體とし て見。萬物を承認し 實在を直覺す。		
光	慧	智			
在を覺り、智識	世界の直覺は實 念を覺ものなり	自覺の直覺は概 と云ふ概念	自我の直覺 自 己に依て事々行 はるに由り自由		

二

圓滿報身德 神靈正義恩寵智慧等 智光虛徹靈明十方滿	無差別而照差別	無量光 主質 體 (一)無量差別自性 顯示清淨法身一如 理	清淨法身德 至純絶對理性態	客體 終局	報 宗教主體形而上。同一の三方面	無 對 光 此等變化の内に齊整 亂れざる理法あるを 直覺す。此に至て洪 釣は一大統合として 直覺す。能く宇宙の 何物たるを知るに至 る。	限 非經過的現在即絶對的 同時態なり。 精神態とは凝固(無生) の不動たるを要せず其 存在本體の中に活動し 空間時間を生産し質の 生活をなさしむ自中存 在なり。
無差別靈に上の色相なし	無差別靈に上の色相なし	無差別靈に上の色相なし	無差別靈に上の色相なし	無差別靈に上の色相なし	無差別靈に上の色相なし	無差別靈に上の色相なし	無差別靈に上の色相なし

四

五

<p>無邊光 屬性 相 此光照ニ無邊差別界 屬性ニ其實相即無邊 聖徳なることを知ら しむ。 無邊の煩惱も此光に て聖徳を現はす</p>	<p>十界屬性各十如と云 相(表のすがた) 性(裏の性分) 體(主質)力(能力) 作(作用)因(本因) 緣(資緣)果(果成) 報(報應)等(本末同)</p>	<p>應身徳 盡十方法界に報應二 身を現して化用を施 す 無碍光 功能 用 又衆生信仰の因(一) には應を感ぐしめ解 脱靈化せしむは此光 なり此光能衆生を變 化して成聖</p>	<p>十界互九界に變化すべ き性能具備し其心理作 用に緣て互に變作すれ ば即百界に千如の形式 を理に具す國と身と心 に三千となる。此三千 は心の作用に依て轉化 す。</p>	<p>一切諸佛此一佛に歸。 諸佛の未を攝して一 佛に歸するが故。 無對光 其本一佛にして二佛 なきが故に。</p>		<p>絶對的本體 一切の萬物一切の衆 生より一切の諸佛も 是より生ず。 一物として此の理の 外にあるものなし。</p>
<p>無相 すべての層性により 生ずれども本無相な り</p>		<p>無作 是不可思議。無作の 作は自然の作にして 常に一切を造作す。</p>	<p>天主是を造物と</p>	<p>七</p>		

<p>一切諸佛此光に依て 成佛(般舟) 三身此より出るが故 に(楞伽) 如來十身 法報應三身 彌陀一佛より十方無 限の佛と現す</p>	<p>一切衆生 六凡四聖</p>	<p>炎王光 十方法界衆生の惑業 苦を斷盡するところ の光個人との關係に は智情意の惡素質を 脱却する光</p>	<p>六凡の惑業苦斷盡し無 明塵沙見思等を十方法 界のあらゆる(一)個人 の心理には知と情との 垢質を脱す</p>	<p>性 單一 空間、自中存 在、絶待 無難 空間、世界機 制質を離へず 不易 時間、世界因 果律の上に出 てたるなり 悠久 時間、常現在 無限 空間を盡し時 間を盡し同時 同所に遍滿す</p>	<p>眞 眞實如々理 如々の智如々の理 を顯す 神の本體 美 大智慧光明無邊性 徳 善</p>	<p>故に無對即ち絶對の 理なり。 彌陀の本體即萬物の 根底なり。故に本體 はかりならば彌陀は 迷の父なり。然れど も解脫靈化の光によ つてさとの父たる なり。</p>	<p>本體には惑業苦もなく して 法身に乖離する處より 無明となり 衆生の根底にして垢に あらず、淨に非ず。 個體</p>	<p>九</p>
---	----------------------	--	---	---	---	--	---	----------

相
至至至正自在慈悲 美善真義力悲慧

宗教關係心理

不 斷 光	智 慧 光	歡 喜 光	清 淨 光
聖 靈 化	佛 知 見 開 悟	感 情 靈 福	六 根 清 淨
意 志 垢 <small>世俗情操 世界動機 自我執著</small>	智 力 無 明	感 情 罪 苦 過 毒	感 覺 性 垢 質

二

一〇

昭和五年六月廿八日 印刷
昭和五年六月三十日 發行

編輯兼 山崎 辨成
發行人
牛込區早稻田鶴卷町四〇三
印刷人 小林 七太郎
牛込區早稻田鶴卷町四〇三
印刷所 小林印刷所

東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番